
真・恋姫＋無双 覇道凱旋伝

天叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 霸道凱旋伝

【Nコード】

N9645Y

【作者名】

天叢雲

【あらすじ】

世界を敵にし、死に絶えた“霸王”は新たな人生を歩む。

そこは三國志の・・・孫堅が女性の世界だった・・・。

ちなみにこれ、織斑家の最強親父の基になったやつです。

霸王、死すとのこと。

「……誰も……我^{オレ}を満たしてくれない」

男は絶望し、嘆く。

「己の強さ」。

周りの弱さに。

世界の脆さに。

「我が生きる意味も意味を為さない……我^{オレ}は何のために生きる？」

2

男は幼い頃から孤独だった。

類い稀なる才能。

他を圧倒する才能。

全てを凌駕する才能。

全てを知り得る才能。

それが男を孤独にした要因。

幼き日、男は両親に気味悪がられて捨てられ、今まで一人で生き抜いた。

「誰か我を楽しませる者はいないのか……」

男は渴望する。

自分の好敵手たる存在。

自分を理解してくれる存在。

自分を愛してくれる存在。

それらは男が手に入れたくて止まない存在。

「もう……我が人生に道はない。ここで果てるのもまた一興か……
ふつ。思えばなんともくだらぬ人生よ」

男は我が手を見る。

血にまみれた手。

戦い抜いた手。

傷がある手。

それは男の歩んだ道を示すものだった。

戦い。ただそれだけで生きてきた武人の証たる両手であった。

男の名はない。とうの昔に忘れ、捨て、そして呼ばれることがなくなつた。

「まあ、よい……我^{オレ}はもう疲れた……」

男は静かに目を閉じると周りに燃え盛る炎に身を委ねるようにした。

男に名はない。だが、男はこう呼ばれていた……。

“霸王”と・・・。

今、霸王の新たなる人生が始まる・・・。

霸王、外史の大地を踏むとのこと。

・・・む？ここは・・・なぜ我は生きている？

「・・・見渡す限りの大地、いや、荒野か・・・我は脱出したわけではないのだが」

確かにあの時、我は炎と共に我が城と灰に帰したはず。

なのになぜ我は生きている？

「まあ、よい。我が生きるならばそれは天からの命。生きている意味は探せばよいな」

我は立ち上がると服についた埃や土を払う。

服装も我が世界を統一し、破壊したときと変わらない血のように紅いロングコートのままだった。

他には変わった場所はないが妙に氣が溢れ、覇気は全盛期の我と同等かそれ以上に感じた。

あとは少し背が低くなり、声も少し高くなって生やしていた鬚もなくなっていた。

「・・・ふむ。わからないことだらけで混乱するな・・・まずは近くに村がないかを探すとしよう」

取り敢えず我は近くに村がないかを探すことにし、辺りを歩くことにした。

その間に、自分の体のスペックを改めて確認することにする。

氣もそうだが、今まで我の力となっていた覇氣もかなり強化されている。

腕力も脚力も生前よりも遥かに凌駕し、体が軽く感じる。

「・・・む？血の臭い・・・近くで戦いか？」

それはあり得ない。と思いたい。

我は世界を統一した際に争い事を無くすためにあらゆる武器を破壊し、人の体を傷つけにくくしたはず。

ならばなぜ？

我が出した結論が誤りであることを祈りたいものだな・・・。

我は血の臭いがする場所に一目散に駆ける。

やはり、スピードもかなり上がっており、風のように駆けることができた。

「ふむ。いい感じだ。これならばまだ戦えるであろう」

しばらく駆けること二十分。

前方から何か焼ける臭いと濃い血の臭いが強くなってきた。

同時に、村のようなものが見え、家が燃えてるのか、黒い煙がのぼっていた。

・・・また、賊か。

「まずは村に住むものの救出を最優先にし、賊がいるならば・・・叩き潰す」

最後に地面を思いつきり蹴ると村を見渡せる崖の上に飛び乗る。

そこから見えるは地獄。

昔ながらの農民のような服を着たものが多く、一方は刃物などを持って暴れており、略奪などをしていた。

「・・・む？時代が違うのか・・・？我が生きた国はあんなものではないはず・・・っと。まずは助けようか」

氣で体を強化すると高い崖の上から飛び降り、逃げる子供と母親を追う賊の前に来るよう調整する。

そして下卑じみた笑いをする賊を上から踵落としをし、体を真つ二つにした。

「へ？」

他の賊が呆けている間に一気に懐に踏み込み、二人を手刀で首を切り落とす。

血で体を汚すのも構わず、さらに賊に近づいて数を減らしていく。

「な、なんだ!？」

「戦いの最中だ。余所見などしては命を落とすぞ」

子供と母親らしき人物を追い掛けていたのは全部で七人。

三人は片付け、残るは・・・三人か。

賊の頭を握り潰しながら残った三人に目を向ける。

「ひ、ひい！？お前、なんなんだよ！？」

「貴様に名乗る名前はない・・・と言いたいところだが名前はないのでな・・・」

「やっちまえ！」

「・・・人の話は最後まで聞く気はないのか・・・まあ、よい」

剣を持って走ってくる賊にカウンターで顔を殴ると破裂し、首が吹き飛んだ。

さらに横から斬りかかる賊の剣を指ではさんで止めると剣を叩き折る。

驚く賊を無視して蹴りで腹に穴を開けて絶命させる。

「自己紹介、にはならぬが・・・」

瞬間、辺りに濃密な殺気と圧倒的な覇気が満ち、賊は怯え始める。

「我は霸王。とある国にて王として生き、今はただの武人だ」

さあ・・・我が覇道を見据えよ。怯える。刮目せよ！

霸王、武を振るつこのこと。

我が前を阻むは人の道より外れた賊の大群。

だが我にとって烏合の衆など取るに足りない。

「さあ・・・抗え。運がよければ命は救われるかもしれない」

「なめんなあああああ！！！」

見たところ賊の数は千かそれよりも上。

よくもまあ、ここまで集められたと感心する。

斬りかかる賊の首を掴むと一瞬で骨を容易くへし折り、投げ捨てる
と賊の中に突っ込む。

元々、我はカウンター型の戦い方をするのだが今回は体の調子を確
認するためにわざわざ攻めに回っている。

我が武器は体ひとつ、拳こそが我が唯一にして無比なる武器。

鍛え抜かれた肉体はそれだけで凶器となりうる。

その凶器を振るい、賊の四人を手刀で絶命させるとさらに近くの賊
の頭を両手で二人掴む。

「戦嵐虚狼」

氣で強化した腕から氣を飛ばすイメージをすると、突き出された腕から狼のような氣の塊が賊を食らう。

それに驚いて逃げようとするものがあるが、刺さっていた剣や矢を投げて足止めをすると一気に跳躍して頭を落とす。

「ば、バケモノだ！逃げろ！」

「うわああああああっ！！！」

数をまた三百ほど減らすと自分達は敵わないと悟ったのか我先にと逃げ始めた。

昔なら見逃したが経験により、逃がせばまたいつか襲うことは目に見えている。

だから……。

「逃がすと思うか……？我と敵対したことを後悔して逝くがよい」

拳以外に我は武器を扱える。

その中で槍を選択、賊のものであろう無骨な槍を手にとって神速の

早さで近付く。

槍を一振りすれば同時に七の命が消え、二振りすれば十の命が消えていく。

まるで機械のように槍を振るい、賊を殺す。

「わ、悪かった！もうしないからたすく」

「言い訳は閻魔にしる」

命乞いするものも容赦なく斬り殺す。

命乞いするならば最初からしなければいい話であるため、慈悲など与えない。

さらに斬る。薙ぐ。蹴る。突く。それにより、どんどん賊の数が減っていく。

五分もすれば賊の大群は跡形もなくななり、残るは賊のリーダーだけであった。

「ば、馬鹿な・・・千人はいたんだぞ・・・？なんでたった一人に・・・」

「我が武をもってすれば千など障害にはならん。さて・・・覚悟はいいか？」

「ま、待て！金ならやる！女か？女なら俺たちの根城に腐るほどいる！分けてやるから！助けてくれ頼む！」

「ほう……ならば案内してもらおうか」

「へ……へへへ。ならこちらですぜ旦那」

まだ他に人質がいるならば助けるのが先だな。

こいつを殺すのは救出したあとでいいだろう……残った人生を楽しむがいい……。

髭を生やすリーダーの後を追うように山の方向に歩いていく。

洞窟らしき場所が見えると氣を少しだけ放出しておく。

……かなりいるな。人質に混じって賊もかなりいると感じた。

霸王、霸道を魅せるこのじつ。

「へ、へへへ。引つ掛かったな！ここにはまだ二千ほど部下がいる！てめえもこれでおしまいだ！」

「・・・ふん。予測など容易い。貴様がこつするだろうとはわかりきったことだ」

案の定、洞窟らしき場所の中には武器やらなんやらを持った賊が待ち構えていた。

数は二千と言っていたが感じるのは多くて千ほどしかない。

この程度なら疲れていない我にとっては赤子の手を捻るより容易いことじつ。

「・・・さて。残された人生は楽しめたか？」

「は？てめえの人生だろ？」

「頭がイカれたか？ぎゃははははは！」

賊が気持ち悪い笑いをして高笑いをする。

その一人がニヤニヤと笑いながら近付き、剣を首に突きつけてきた。

「おい兄ちゃん。珍しい服着てるな。それをよこしたら助けてやる
うか？」

「・・・遺言はそれだけだな？」

「は？面白い冗談d」

首に剣を突きつけて脅す賊の顔を掌で押すように叩くと顔が弾けと
んだ。

それを開戦と取ったのか賊が一斉に飛び掛かるように走ってきた。

「死ね！」

「三人以上でかかれ！絶対に一対一で戦うな！」

「・・・ふむ。知識はあるようだな」

迫る刃を避けながら骨を外したり、叩き折ったりしながら先々とリ
ーダーらしき賊に近付いていく。

むう・・・やはり鈍っているな。昔なら少し手を出すだけで関節を
外せたんだが・・・。

骨が折れる、砕ける、外れる音を立てながら続々と戦闘不能にして

いくと賊から焦りを感じた。

そこにつけこみ、さらにギアを上げて賊を殺していく。

「くそっ！死ね！死ねよ！」

「甘い」

焦る顔をする賊の剣をまた指ではさんで止めるとそのまま蹴りで首の骨を折った。

慌てる賊のリーダー。

そして我はただ黙々と命を消すように殴り、時には奪った武器で戦う。

「お、おいてめえら！しっかりしろよ！」

「ですが頭！あいつは強すぎますぜ！？」

「いいからなんとかしろ！俺を守れ！」

「仙覇瞬連殺」

奪った剣を腰だめに構え、居合いで一気に周りの五十の賊の首を斬り落とす。

それにより、またもリーダーは逃げようとするが死体に足を取られ、逃げられずに転ぶ。

転んだリーダーの背中を踏むと先が少し欠けた剣を首に添える。

「さて・・・残るはまたお前だけだ」

「あ、あひい・・・」

「我は機会を与え、貴様はその機会を無下にした。ならば殺されても文句は言えんな？」

「ゆ、ゆるしt」

「死ね」

ザシュッ！

首を斬ると持っていた剣を捨て、氣を感じる場所に歩いていく。

その後ろは・・・屍の山しかなかった。

「・・・これはひどいな」

歩いてすぐに目的地に着いた。

そこには大きな牢屋があり、中には女性が怯えながら抱き合い、我を見ていた。

感じる気はここだけ・・・ならば生き残ったもの、いるものはここに纏められていたということか。

牢屋に近付き、大きな鍵を素手で握り潰すと牢屋の扉を開ける。

「逃げる。貴様らはもう自由、拐った賊は全て片付けておいた」

女性達は呆然としていたが私の言葉を理解すると泣き始める。

次々と牢屋から飛び出し、礼を言いながら外に出てきた。

「ありがとうございます。ありがとうございます・・・」

「もう助からないかと・・・」

「気にするな。村まで送ろう。服を着てないものは何かで代用しろ」

宝物庫らしき場所には服やら宝石やら武器やらとかなり溜め込んでいたものがあつた。

その中から綺麗な服だけを裸の女性に渡すと我は顔についた血をロングコートで拭くと女性達をさっきの村まで送ることにした。

道中、女性達から話を聞いてここがどこかを理解した。

「（・・・まさか三國志の世界とは・・・なぜ我はこんな場所に来たのだ？）」

ここはどうやら呉となる場所の領地らしく、孫堅なる王が治めてると女性は言った。

詳しく三國志を知らないがさすがに最低限の情報は知り得てる。

孫堅の息子である孫策、魏の曹操、蜀の劉備に名のある関羽や趙雲、張飛、孫権に黄蓋などは知っている。

・・・むやみやたらに三國志の歴史には介入は許されんな・・・。

「あ、あの・・・貴方のお名前は？」

「む？すまないが我に名前はない。生まれてからはあったようだが
とうの昔に忘れ去った」

「え！？名前が！？なら今まではどうしてたんですか！？」

「二つ名で呼ばれていた。誰もがな」

「ちなみにその名前は・・・？」

「やれやれ。さつきからよく質問をするな。」

「まあ、我が名はこれしかないから名乗るしかあるまい。」

「名乗れば曹操に目をつけられるが無視するか叩きのめすとしよう。」

「霸王・・・」

「そう。我は覇道を突き進む王たる存在、霸王だ」

「その日から三國から狙われるようになるとは我はまだ知らなかった。」

そして三國志の時代と大きく、小さく離れた世界だと知るのもまた
知らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9645y/>

真・恋姫†無双 霸道凱旋伝

2011年12月2日00時52分発行